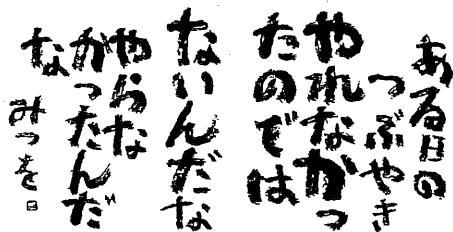


さくら第526号

令和 5年10月

さくら

発行所 さくらそろばん
発行者 平瀬重雄
春江町境 17-7: TEL51-1337
hirase@mx2.fctv.ne.jp



『手書きのススメ』

手紙やハガキなど普通の郵便物を投函すれば翌日には相手にとどくという制度が続いていましたが、2021年10月2日の土曜日からは届かなくなり、翌々日に着くようになりました。

誕生ハガキを出す時に、金曜日や月曜日が休日の時は4日ほど要するようになりました。

土曜日の集荷や配達がなくなった理由の一つにインターネットの普及、各種請求書などがweb化され郵便物が減少傾向にあり、働き方改革をすすめるなどが影響するといえます。

郵便といえば、前島 密の名が浮かびます。イギリスに渡航し郵便事業を学び明治4年(1871)に国の郵便の取り扱いが開始され、以後、今日まで連綿と郵便制度が続いています。

さて、郵便の歴史をさかのぼると、鎌倉時代から京都・鎌倉を結ぶ鎌倉飛脚があり72時間で運んだといえます。これは効用にかぎられ、民間の人が利用できる「飛脚制度」が整備されたのは江戸時代になってからといえます。

江戸時代には五街道が整備され、宿場が10^{km}ほどの間隔にあり、宰領(さいりょう)という者が馬に荷物や手紙などを積み、馬方に引かせ宿場ごとに乗り替えるリレー方式で運んだ。

また、一人の男性が荷物や手紙などをついでかけ足で運ぶ飛脚が多くなります。

この当時の飛脚には「継飛脚・つぎびきゃく」という徳川幕府が設けた飛脚が重要な文書などを運んだといえます。「大名飛脚・だいみょうびきゃく」は江戸と国もとの間をむすんだ飛脚でしたが町飛脚が発達するにつれ廃止されます。

「町飛脚・まちびきゃく」は1663年、江戸・京都

・大阪間で行われ、その後関東一円に広がり1746年には新潟まで拡大されました。

飛脚の姿は以前の佐川急便のトラックに描かれてあり、細い棒の先につけた箱をかついで走ります。ちなみに、走り方は「ナンバ走り」と言われ、右手と右足、左手と左足をそろえて出しながら走ります。この身体をねじる走り方だと疲れずに坂道でも速く走れるといえます。

運賃は、江戸と京都・大阪間を30日かけて手紙をとどける「並便」は約750円。出発日が定期で10日以内の「幸便」は約1500円。5日間で届ける便は約3万円。特別な「仕立便」なら5日で約30万円。2日なら約140万円。

飛脚便は目的地までの宿場数や同数の飛脚がいるので、一人当たりは約3万円以内。

ところで疑問に思っていることがあります。明治維新前後のころ、坂本龍馬が残した書状は140通あるといえます。どのようにして意思を交わしていたのでしょうか。今のような通信手段はなく、自分で巻紙などに筆で書くのみです。その当時、今のようなスマホやSNSやラインなどがあつたとすれば、時代はどう変化したのでしょうか。考えると楽しくなります。

メールとちがい本人が手書きした文章ですからその価値は計り知れません。「何でも鑑定団」ではメールでは価値が付きません。直筆だからこそ値打ちがあります。

ところで世界一短い手紙は、1862年フランスの小説家ヴィクトル・マリー・ユーゴの『レ・ミゼラブル』。日本語では「ああ無情」が発売されてどのような評判か、売れゆきかを「？」と出版社に訊ねた時に、よく売れているという意味で「！」と返信されました。

皆さんも、離れて暮らす祖父母や友だちなどに自分でハガキなどを書いてください。手にした人はとても喜びます。字がへたとか、何を書けばいいなど気にせず、短い言葉でも今の気持ちを素直に書きましょう。相手の顔を思い浮かべ、嬉しいことなどを書いてください。

日本一短い手紙は、『一筆申す 火の用心 お仙瘡せさすな 馬肥やせかしく』ですね。

あおぞら
青空に
ゆび
指で字を書く
あき
秋の暮れ
きこ
季語
あき
秋の暮れ
こぼやしいっさ
小林一茶